

去来(石を介す)

2023年7月7日(金)－23日(日)

長野県伊那文化会館

若手作家公募個展「トライアルギャラリー2023」

去来(石を介す)

細萱航平

おそらく中学生のときに、私は高遠を訪れている。林の中、小川の向こうで出会った同級生は妙に余所余所しくて、他人行儀に礼をすると直ぐに向こうに行ってしまった。そのような記憶がある。桜が咲いていたような気がするし、違う気もする。今回、展覧会への参加が決まり、調査のために再びこの場所を訪れている。今、ここには桜が咲いている。あのときの桜は、今のこの桜の間違いだらうかと思う。あの日のうららかな光は、今の光の温かさだろうかと思う。私の見た同級生は、もはや私の今の主観にしかいないのではないかと思う。2023年、久しぶりに訪れたこの場所で思ったことは、そんなことだった。

大学で地質学を学んだ私は、高遠石に興味を持った。かつてある石工が見出し、多くの石仏を彫り出したという。そもそも、その石工たちが高遠石工と呼ばれ、全国的に名を馳せた存在だったとのことだ。十分に検証され、疑いようのない実在として歴史化されたそれらは、いわば共有されるべく公式化した過去として私の前に現れる。しかし、ひとたび私の主観を介してそれらが私の中に生じると、根となるものから切り離されてしまったように、存在があやふやなものになってしまう。

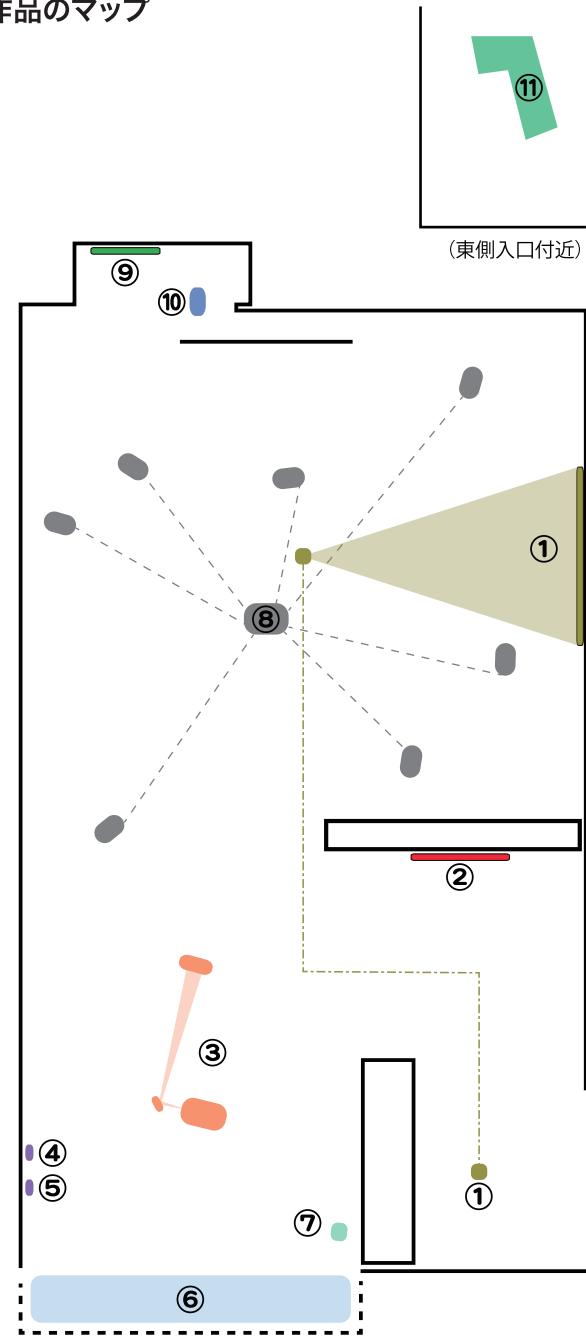
しかし、彼らが手がけたモノたちは遺り続け、まるである時空から突如私の時空に飛んできたかのように、私の前に在る。高遠石で彫られたモノたちに私が手を触れる。緻密で重たく、ノミの痕が手に引っかかり、しかし滑らかさもあり、確かに私はこれを感じている。この感覚は私の「今・ここ」にしか存在しない。

今そこにある石は、ただ在るようにして私たちの前にあるのだけれど、彼らがどこから来たのかを私たちは知らない。何食わぬ顔をして、何の変哲もなく、さも当然かのように、そこに転がっている。自然科学の言語でコミュニケーションをとると、彼らが数百万や数千万、さらには数億年も前からやって来たことがわかる。私たちの時間スケール空間スケールを大きく超えた、つまりあまりにも異質なものが、私たちの「今・ここ」に普通に存在している、ということに背筋が少しひんやりする。

かつてこの場所を訪れたときの記憶や、語られるこの場所の歴史、あるいは科学の言語による太古の時代が、私の目の前に立ち上がる。それは、過去の出来事として当たり前にあるように振る舞うけれども、私が感じるのは「今・ここ」でしかありえず、つまりそれが本当にあったかどうかを今の私が感覚することはできない。しかしモノや場所は、まるで過去の時空からテレポートしたように、動かしようのない異質な存在として、私の眼前に突如飛来する。私と同じ時空に存在しているように見えながら、実際は私と異なる時間・空間を孕んだまま、何食わぬ顔で私と隣り合い、今の私の感覚にはたらきかける。それらが、私の中に新たな過去を生じさせる。

あらゆる過去が私の主観を介して私の「今・ここ」に生じる。私という再生装置が、多様な言語を解釈し、同一のモノや場所から複数の過去を現在に呼び起こしている。それらが同一地平上に並ぶ空間を、ここに展開しようと試みた。

会場と作品のマップ



- ① 星を浮かべる (高遠石) 2023
- ② scanning microscope (対馬のホルンフェルス) 2016
- ③ Temporal Monument Project (Eclipse) 2023
- ④ Sphere (梨野層) 2023
- ⑤ Sphere (広瀬川凝灰岩) 2023
- ⑥ XRF (高遠石) 2023
- ⑦ いし 2022
- ⑧ たたずむ 2017
- ⑨ 柱状図 (竜の口層と向山層) 2023
- ⑩ raindrops (6月9日の三峰川) 2023
- ⑪ Temporal Monument Project (Voyager) 2020

※展示時と一部作品タイトルを変更しています

作品について

星を浮かべる（高遠石）

星は石でできている。そしてそのような石をプレパラートに貼り付け、厚み數十 μm まで薄くしたものを、岩石薄片という。この薄片を偏光板2枚で挟み込んでやると、各鉱物を通過した光に色が見えるようになる。このようにして得られたイメージを、空に浮かべる。

scanning microscope (対馬のホルンフェルス)

地上に露出した岩石の上を、方位磁針と方眼紙を持って簡易な測量を行う。地質学ではルートマップと呼ばれるこの手法では、各地点の方角と距離を測り、方眼紙の上に点を落とすことで、簡易な地図を作成する。この点を繋ぐことで、やがてその場所の姿が浮かび上がるという塩梅だ。私は電子顕微鏡のように、地球の表面を走査する。あるいは、目隠しをしたまま皮膚に触れ、そのかたちを確かめるように、私は地球の皮膚をなぞっていく。

sphere

地質のフィールドワークでは、まず表土の下にある岩石が露出している露頭を探さなければならない。地層の剥ぎ取り試料というのは、そうして見つけた露頭を特殊な樹脂を使って剥ぎ取ってきた実際の地層の試料である。そのため、よく見ると堆積岩の縞模様などが観察できる。露頭を直接彫刻し、これを剥ぎ取ることで球面の剥ぎ取り試料を得ている。



Temporal Monument Project (Eclipse)

私は高遠石を彫れるだろうか。高遠石は守屋貞治がしばしば使った石で、伊那の付近にあるもので彼の作にあたるものは、多くの場合この石でつくられているようだ。しかし、当然ではあるが、遠くでつくったものになるとこの石は使われていない。重さゆえ、持っていくことが難しいからだ。道具さえ持つていけば、あとは現場の石でつくれるというのが、高遠石工が各地でその作品を残している理由でもあると思うが、守屋貞治としては高遠石を持って行きたいときもあったかもしれない、と勝手ながら想像した。

今なら石を遠くに送ることは難しくないが、自分の身体で石を運ぶとしたらどのくらい大変だろうかと思い、カバンに入るサイズの高遠石を、新幹線で居住地である仙台に持ち帰ってみることにした。それを聞いた父母からは随分と止められたが、試してみないことにはわからないということで制止を振り切り、持ち帰った。私が一度言い出したらという点に関しては、父母も諦めていると思う。ただ結果から言えば、駅から作業場まで、更に言えば駅の中を移動するだけでも、ある程度しんどかったことは白状しなければならない。

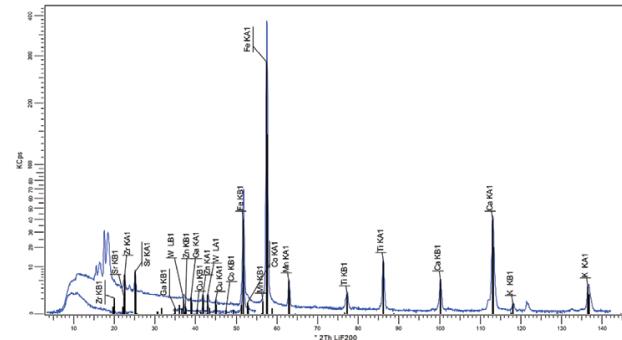


そのような経験もあり、私はこの石を遠くに飛ばしてみようと思った。もう少し言えば、この石のエッセンスのようなものを抽出し、飛ばしやすいかたちにしてみようと思った。それで、ひとまず私がやってきたことといえば、石の内部のイメージを光に変え、モニュメンタルなモノとしての石を別の提示方法に置き換えることであったから、今回はそれを高遠石の塊に試した。

高遠石のイメージを反映した光は、短い距離ではあるが空間を飛び、ある地点に到着する。光に変えられた高遠石のイメージは、時にその前を横切る人々の影になる。私は、守屋貞治のように石から仏を彫ることはできない。だが、もし私が高遠石から人の姿を彫るのであれば。

XRF (高遠石)

平たくいえば、蛍光X線分析を行うことで、対象の物質にどのような元素が含まれているのかわかる。今回はこれを用いて高遠石の分析を行った。どのような元素がどの程度含まれるのかは、検出されるX線のエネルギーや強度から判定される。このとき得られたX線のエネルギーと強度の分布図を、ガラスケースの中に再現することを試みた。ただし、再現のために用いた素材の性質が反映されるため、実際の分布図とはやや異なる曲線が現れる。



いし

薄片にするとわかるように、岩石は光を通すことができ、どちらかといえば透明である。ただある一定の厚みを持ったとき、不透明になってしまうだけだ。それは、人も同じであると思う。太陽に手を透かせば、光は手を通過していく。

石をイメージしたとき、その外側は表面というより表層だろうと思う。我々は石を見ると、金属のように光をカチリと跳ね返す表面を見ているのではなく、ある厚みの表層を見ている。

たたずむ

中央の人型の彫刻は、アクリル板を熱で曲げて成形している。空間に点在する7つの黄色い風車は、中央の彫刻につながっている。送風機の風によって回転する風車が電気を起こし、彫刻に光が灯る、というようになっている。元々は、2017年に修了制作としてつくったものだ。今回この展示を考えるときに、ふいにこの作品の姿が、私が昔高遠を訪れたときの記憶に重なった。

柱状図(竜の口層と向山層)

地層は基本的に下部から上部に向かって様々に岩相が変化するため、フィールドワークではそれらを記録し、柱状図としてまとめる。実際は地層が柱状に露出するわけではないが、もし柱状に切り出したらこのように重なっている、ということを表した模式図と言える。

7、8m近くある実際の地層をそのまま柱状図として表現するため、東北大学総合学術博物館の協力を得て、露頭を3Dデータ化し、これを1枚の写真として出力した。こうすることで、通常は高いところになるほど仰角となり、見上げた画像となってしまうところを、どの高さの地層も正面から見た図として表すことができる。



raindrops (6月9日の三峰川)

調査のために、予定を遣り繰りして再び高遠を訪れた日は大雨の翌日だった。当初は地層の剥ぎ取りをしようと思っていたが、三峰川が大量に増水していたため目的の場所に近づけず、どうしようかと途方にくれた。川辺には増水した水で堆積した砂があり、そこに木々から垂れたと思われる零の跡とおぼしき穴があいていた。もしかしたらこの砂がそのまま堆積していたら、長い年月の後には砂岩としてこの跡を残し得るかもしれないなどと考え、せっかくなのでこれを剥ぎ取りすることにした。見えているのは零の跡の裏側である。

後日、作業場に戻り、他の作品に使おうと思っていたアームスタンドと凹レンズをたまたま組み合わせた時、なかなか良いと思ったと同時に、あの日はこんな感じの空気感であったような気がした。いわばこの作品は、あの日のことを思い出しながら記録した日記のようなものだ。

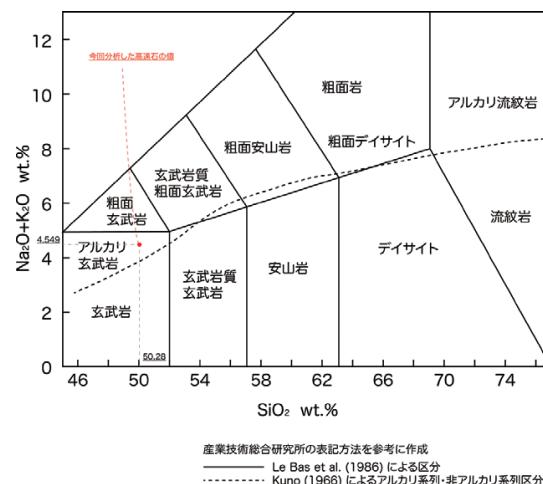
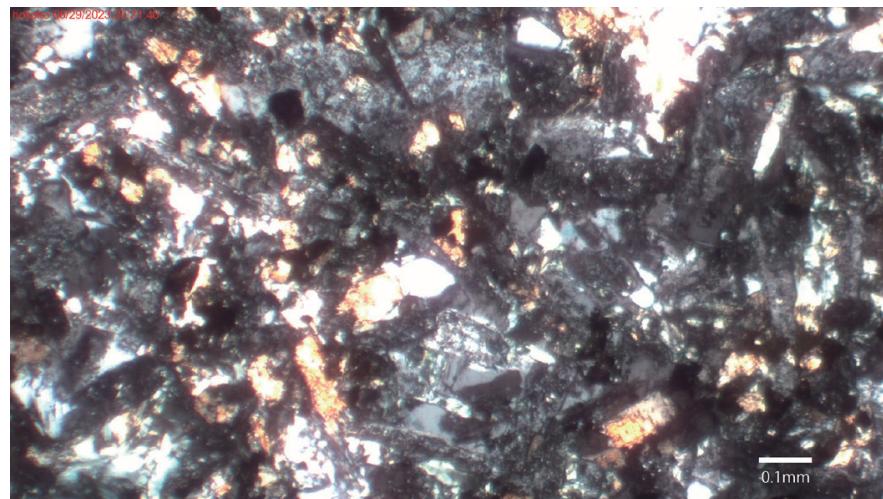
Temporal Monument Project (Voyager)

仮設的なモニュメント設えるプロジェクト。通常、道祖神は場所に根付くことが多いが、ここではそれをバイクに仮説的に据付け、各地に移動できるように設えた。旅人の無事を祈願する道祖神が、自ら旅をする。

高遠石の分析について

作品に使用した高遠石について、結晶構造の観察と蛍光X線分析(XRF)による全岩化学組成分析を行った。

(%)	Na ₂ O	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	ZnO	SrO	ZrO ₂	CuO	NiO
TKT001	3.92	15.16	50.28	0.34	0.03	0.62	7.06	2.06	13.64	0.01	0.03	0.01	0.00	0.00
	MgO	BaO	P ₂ O ₅	MnO	As ₂ O ₃	CoO	Rb ₂ O	V ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Ga ₂ O ₃	WO ₃	Nb ₂ O ₅	H ₂ O	(LOI)
	3.99	0.00	0.42	0.21	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.05	0.00	2.15	2.15



若手作家公募個展「トライアル・ギャラリー2023」
細萱航平個展「去来(石を介す)」
日時: 2023年7月7日(金)~7月23日(日) 9:00~17:00
ただし10日(月)、18日(火)は休館日
会場:長野県伊那文化会館

『「去来(石を介す)」会場頒布冊子』
編集:細萱航平
発行日:2023年7月7日
追記日:2024年1月20日